

ラベルワークを活用した老年看護学実習における学びの分析

The Analysis of the Learning with the Use of Labeling Works in the Elderly Nursing Science

永田 美和子, 森田 恵子, 渡邊 充子

要 約

ラベルワークを活用した老年看護学実習における学びの内容を分析し、実習目標に照らした実習評価を行い、実習指導のあり方を検討した。結果、実習目標はほぼ達成されていた。特に、看護過程に関する学習や、高齢者観・看護観についての学習は深められていた。一方、社会的側面についての理解やソーシャルサポートシステムの学習は不足しており、カンファレンスや学習の機会を捉えたタイムリーな学習強化の必要性が示唆された。また、老年看護学実習目標に該当しない学びや、基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ、成人看護学実習Ⅰの目標に該当する学びも見られた。

キーワード：ラベルワーク，老年看護学実習，実習目標，実習評価

はじめに

近年の類を見ない速度での少子高齢化，核家族化などにより，1997年のカリキュラム改正で，老人看護学が老年看護学と名称が変わり，4単位の老年看護学実習として臨地実習においても従来の成人・老人看護学実習から独立して実施することになった。高齢者と共に生活をし，接する機会が少ない看護学生が増えている中で，学生が1対1の患者とのかかわり，切磋琢磨しながら自己の老年観や看護観を深められるような，臨地実習の意義は極めて重要である。

K短期大学の老年看護学実習では，「高齢者の加齢に伴う身体・精神的変化，置かれている社会環境を理解し，健康レベルに応じた看護活動を行う。高齢者への看護活動を客観視し，自己の高齢者観や看護観を深める」を目的に，医療機関・ケア施設（介護老人保健施設・指定介護療養型施設）で4単位の实習を実施している。実習を終えて学生は，「高齢者に対する印象が変わった」「同じ年齢であっても，個人によって違う」など，レポートに学びを記述している。また，ラベルワークを活用し，グループ討議することで学びを深めさせている。しかしながら，実習目的・目標に照らし合わせた実習評価はなされていないのが現状である。

そこで本研究は，老年看護学実習による学びの内容を分析し，実習目標に照らした実習評価を行うと共

に，臨地実習の指導のあり方を検討した。

研究目的

ラベルワークを活用した老年看護学実習における学生の学びを分析し，実習目標に照らした実習評価を行い，老年看護学実習方法に対する示唆を得ることを目的とする。

実習概要

1. 老年看護学実習の目的・目標（表1）
2. 実習方法

看護学科3年生は，1グループ4名～5名編成の18グループに分かれ，臨地実習20単位を学習する。

老年看護学実習4単位の実習時間は，4週間（180時間）内老年看護学実習Ⅰは1週間（45時間）であり，地域で生活する高齢者を対象として，老人福祉センター・デイサービスセンターで実習を行う。老年看護学実習Ⅱは3週間（135時間）であり，介護老人保健施設（7グループ），指定介護療養型医療施設（9グループ），病院（2グループ）の3施設に分かれ1名以上の入所者または患者を受け持ち実習する。

研究方法

1. 対象

K短期大学看護学科3年生で老年看護学実習を終了

表1 老年看護学実習目的・目標

<p><目的></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 高齢者の加齢に伴う身体・精神的变化、置かれている社会環境を理解し、健康レベルに応じた看護活動を行う。 2. 高齢者への看護活動を客観視し、自己の高齢者観や看護観を深める。
<p><目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 高齢者の身体的、精神的、社会的側面の特徴とライフステージが理解できる。 <ol style="list-style-type: none"> (1) 加齢に伴う心身の変化、社会的特徴が理解できる。 (2) 高齢者の生活史や未来に目を向け、成熟と衰退、成長の視点から、総合的な対象の捉え方ができる。 2. 高齢者のもつ健康障害と生活障害が理解できる。 <ol style="list-style-type: none"> (1) 高齢者の疾病の特徴を踏まえ、健康の段階を判断できる。 (2) 介護認定度、痴呆度、ADL、IADLなどから、生活上の障害を理解することができる。 (3) 加齢、健康障害、社会・環境要因が生活に及ぼす影響を理解することができる。 (4) 高齢者の事故・二次障害が理解できる。 3. 老人福祉センター・デイサービスの活動を通して、地域社会で生活する高齢者への援助が理解できる。 <ol style="list-style-type: none"> (1) 老人福祉センターの活動に参加し、機能について理解することができる。 (2) 地域で生活する高齢者を取りまく環境が理解できる。 (3) 高齢者デイサービスの活動に参加し、活動の目的・サービスの活用法を理解することができる。 (4) 要支援・要介護高齢者とその家族への働きかけがわかる。 (5) 高齢者への接し方を理解し、高齢者の自尊心を尊重したかかわり方ができる。 4. 高齢者の健康問題、生活上の問題を解決するための看護過程が展開できる。 <ol style="list-style-type: none"> (1) ゴードンの「機能的健康パターン」の11項目の枠組みに沿って、アセスメントができる。 (2) 看護計画が立案できる。 (3) 立案した看護計画に沿って看護活動を実施し、評価、修正できる。 5. 高齢者の健康生活を支えている家族やソーシャルサポートシステムの現状を知り、保健医療福祉専門職の一員としての役割を理解する。 <ol style="list-style-type: none"> (1) 保健医療福祉専門職の役割が理解でき、連携のあり方を考えることができる。 (2) 家族・友人など高齢者を取り巻く人々の果たす役割が理解できる。 (3) 看護職の役割が理解できる。 (4) 病院、老人保健施設、デイサービス、老人福祉センターの機能・役割が理解でき、施設一箇所一訪問のもつ意味を考えることができる。 6. 高齢者の看護活動を通して、学生自身の高齢者観や看護観を深める。 <ol style="list-style-type: none"> (1) 高齢者の疾病の多様なあり方、個別なあり方に対する看護を考える。 (2) 高齢者のQOLが維持・向上するための看護について考える。 (3) 生活の場の違いによる老年看護の特徴や継続看護について考える。 (4) 看護職者として自己の姿勢や態度について考察し、自己の看護観について考える。

結果

15グループ63名のラベル枚数は248枚で、小皿として記載された看板は161個であった。其の内、意味不明な看板6個を除外し、155個の小皿看板を分析し、実習目標に照合して整理、分類した(表2)。

実習目標1に関するラベルの記述は(以下ラベルとする)は13枚で、全体の8.5%であった。カテゴリは、「高齢者の身体的・精神的特徴についての学び」「高齢者のイメージの変化」「加齢に伴う変化・症状は変化しやすい」「発達課題をふまえたもの」等の7項目に分類された。そのうち特徴的なものは、身体的特徴として「適応能力の低下している高齢者の援助をする上で生活のリズムについて情報収集する大切さを学んだ」と考えていることや、実際に高齢者と接することで、「高齢者でも私たち以上に元気な方やとても健康に気を使っていると感じ、悲観的なイメージから明るいイメージに変わった」という記載がみられた。

実習目標2に関するラベルは17枚で全体の11.0%であった。カテゴリは、「残存機能活用によるセルフケアの向上」「観察・見守ることで、転倒・転落を予防する」「障害とうまく付き合っていくような援助を」等の7項目であった。残存機能活用については、「利用者の残存機能を活かした援助は声かけや見守りから始まることを学んだ」という記載がみられた。

実習目標3に関するラベルは17枚で全体の11.0%であった。カテゴリは、「長寿センターの役割」「自尊心の尊重の重要性」「地域全体での支え合い」等4項目であった。そのうち、老人福祉センター・長寿センターの役割について、「利用者の活力の元、健康の保持・増進・QOL(生活の質)の向上へとつながっている」の記載等や、自尊心について特徴的なものは、「高齢者は自分たちの知らない時代を生きてきた大先輩である」等の記載がみられた。

実習目標4に関するラベルは33枚で全体の21.4%であり、これは2番目に多かった。カテゴリは「看護過程における情報収集・アセスメント・評価・修正の重要性」「情報収集・アセスメントをしてその人にあった個別性を考慮した看護」「リハビリテーションを継続することで、入所者の自信につながる」等の10項目であった。そのうち看護過程の情報収集については、「高齢者には身体的・精神的・社会的な特徴がたくさんあり、特徴をふまえたアセスメントが必要」などの記載がみられた。

実習目標5に関するラベルは7枚で全体の4.6%であ

した18グループ80名中、本研究の同意の得られた15グループ63名。

2. 期間

平成16年4月19日～11月19日。

3. 分析方法

4週間の実習期間中、日々の実習終了時と各週終了時に「老年看護学実習を通して学んだこと、感じたこと、反省」をテーマに各個人でラベルへ学びを記述する。実習終了後、各週終了時に記入したラベルを用いて、グループごとにラベルワークを実施する。ラベルワークに関しては、林のラベルワーク技法¹⁾を用いた。小皿に記載された看板を意味内容の同質性、異質性に従いカテゴリ化した。カテゴリ化したものを実習目標と照合し学びの内容を整理、分類した。

データの信頼性確保のために、分析は共同研究者と共に行い、検討を重ねた。

倫理的配慮

学生に本研究の主旨を口頭で説明し、研究協力・非協力は評価に関係ないこと、秘密保持を説明し、同意を得た。

表2-1 老年看護学実習の実習目標に照合した学びの分類

ラベル数	小皿	カテゴリー	個数	行動目標NO	目標NO
1	高齢者の特徴	高齢者の身体的・精神的・特徴についての学び	5	1)	1 (8.5%)
2	高齢者の特徴				
3	高齢者の特徴を考えて				
4	健康な高齢者の特徴 精神的特徴				
5	身体的特徴				
6	高齢者のイメージの変化	高齢者のイメージの変化	3	1)	
7	本来の高齢者の姿				
8	高齢者のイメージの変化				
10	生活習慣の把握 (患者に合わせる)	生活習慣を把握し患者にあわせる	1	2)	
11	高齢者パワー	高齢者パワーのすばらしさ	1	1)	
12	加齢に伴う変化 症状は変化しやすい	加齢に伴う変化・症状は変化しやすい	1	1)	
13	老年期における個人差	老年期における個人差	1	1)	
14	発達課題	発達課題を踏まえたかかわり	1	2)	
15	自立を促す援助	残存機能活用によるセルフケア能力の向上	6	2)	
16	残存機能をいかす				
17	看護の依存は残存機能の低下				
18	残存機能維持のための声かけの工夫				
19	ADL				
20	残存機能活用によるセルフケア能力の向上				
21	目を離さないことは事故防止	観察・見守ることで、転倒・転落を予防する	3	4)	
22	転倒・転落予防				
23	見守り観察の重要性				
24	痴呆の看護の必要性	痴呆高齢者の看護援助の必要性	2	2)	
25	痴呆高齢者への援助				
26	疾病に対する援助	疾病による状態変化に合わせた看護援助の必要性	2	1)	
27	疾病の変化に合わせて				
28	入院による影響	入院による身体的・精神的影響	2	3)	
29	入院・疾病からくる不安による意欲減退				
30	患者様を取り巻く環境	患者を取り巻く環境の把握	1	3)	
31	障害とうまく付き合っているような援助を	障害とうまく付き合っているような援助を	1	1)2)3)	
32	長寿センターの役割	長寿センターの役割	8	1)3)4)	
33	長寿センターの役割 (憩いの場)				
34	デイサービスの役割				
35	施設の役割				
36	デイサービスと福祉センターの違い				
37	老人福祉センターとデイサービスの役割				
38	施設の役割				
39	健康な高齢者や生活の場デイサービスセンター、老人福祉センター				
40	尊重	自尊心の尊重の重要性	7	6)	
41	尊重				
42	尊重することの重要性				
43	自尊心の尊重				
44	個別の尊重				
45	個人の尊重				
46	尊重				
47	地域全体での支え合い	地域全体での支え合い	1	2)	
48	利用者同士の関わり合い	利用者同士の関わり合い	1	なし	
49	情報収集の大切さ	看護過程における情報収集・アセスメント・評価・修正の重要性	10	1)2)3)	
50	情報収集の工夫				
51	情報の重要性				
52	振り返りを翌日のケアに活かす!				
53	情報収集・アセスメント				
54	特徴をふまえたアセスメントをする				
55	ケアの評価・修正				
56	アセスメントの重要性				
57	看護過程の流れ				
58	患者の全体像の把握				
59	個別性	情報収集・アセスメントをしてその人にあった個別性を考慮した看護	8	3)	
60	個別性を重視				
61	個別性のある看護援助を				
62	個別性と自尊心を考慮する				
63	高齢者の個別性				
64	個別性の看護	看護を実施するには根拠が大切である	5	1)	
65	老年期の個別性				
66	看護の個別性				
67	看護は根拠				
68	根拠の大切さ				
69	目的・根拠の大切さ	リハビリテーションを継続することで、入所者の自信につながる	3	2)	
70	看護は根拠				
71	根拠を持つ				
72	自信をつけてリハビリを				
73	リハビリテーションの継続				
74	リハビリ	患者様にあったケアの工夫	2	3)	
75	患者様に合ったケアの工夫				
76	援助の工夫	体力と休息への配慮	1	1)	
77	体力と休息				
78	家族側の負担	家族の負担への配慮	1	1)	
79	心理面の配慮	心理面を配慮した援助	1	1)	
80	状況に応じた援助	状況に応じた援助	1	3)	
81	利用者の苦痛	利用者の苦痛はストレス増加の原因	1	1)	

表2-2 老年看護学実習の実習目標に照合した学びの分類 (続き)

ラベル数	小皿	カテゴリー	個数	行動目標NO	目標NO
82	協力=チーム医療	情報を共有し、いろいろな職種の人が協力しチーム医療を行っている	3	1)	5 (4.6%)
83	病棟の特徴	他職種との連携からみた病棟の特徴			
84	情報の共有化				
85	在宅への移行・社会資源の活用	社会資源の活用の必要性	2	なし	
86	社会資源の利用方法	施設と病院の日常生活の違いについての学び	1	4)	
87	施設と病院の違い				
88	ひまわりでの看護師の役割	施設における看護師の役割	1	3)	
89	学習の大切さ	学習者の姿勢	5	4)	
90	普段の行動				
91	百聞は一見にしかず				
92	自分の学びにもなる				
93	自主性				
94	余暇活動の大切さ	高齢者の余暇の過ごし方を知り、その意義と大切さの学び	5	2)	
95	余暇の過ごし方				
96	余暇				
97	健康高齢者の余暇の意味				
98	気分転換				
99	患者様の立場に立って考える	患者の立場に立って考え、看護を実施	4	4)	
100	患者主体の看護活動を				
101	患者様の身になる				
102	患者様の身になる				
103	看護の基本は看護の統一と継続看護	日々看護の継続と退院に向けての継続看護の大切さ	3	3)	
104	継続看護				
105	退院後の生活のために				
106	無理せず徐々にステップアップ				
107	患者様のペースに合わせる				
108	患者のペースに合わせ	患者のペースに合わせる事が大切	3	1)	
109	一緒に楽しむ				
110	楽しんでもらう	一緒に楽しみながら、患者にも楽しんでもらう	2	4)	
111	意欲を引き出す	意欲向上のための援助	2	2)	
112	意欲向上のための援助				
113	女性は女性、男性は男性	高齢者になっても男性は男性、女性は女性である	2	1)	
114	高齢者になっても男性は男性 女性は女性				
115	看護の楽しさ	看護の楽しさの実感	1	4)	
116	目的を持った行動	目的を持った行動	1	4)	
117	対象にあった看護	対象にあった看護	1	1)	
118	気持ちは伝わる	患者様に気持ちは伝わる	1	4)	
119	これこそ看護の基本	患者様のことを1番に考えることが看護の基本	1	4)	
120	目標をもつことは意欲を高める!	目標をもつことは意欲を高める	1	2)	
121	患者様の背景	患者様の背景の多様性	1	1)	
122	QOLへの援助	QOLへの援助の必要性	1	2)	
123	共に行う援助の重要性	患者とともに行う援助の重要性	1	2)	
124	コミュニケーション	コミュニケーション技術について ・声かけ、スキンシップ、ボディランゲージ、手法などについての学び	16	基礎①	
125	コミュニケーション・情報収集				
126	看護におけるコミュニケーションの重要性				
127	患者に合ったコミュニケーション方法				
128	コミュニケーション技術				
129	コミュニケーションの力				
130	声かけ援助				
131	コミュニケーション				
132	声かけをする				
133	コミュニケーション能力の把握・話の仕方を工夫する・情緒面に配慮				
134	声かけ・コミュニケーション				
135	コミュニケーション手段				
136	非言語的コミュニケーション				
137	コミュニケーション接し方				
138	話題の選択患者様の個性				
139	患者様の年齢				
140	総合的な援助が重要である。	総合的理解と援助の重要性	2	基礎②	
141	患者様の総合的理解				
142	施設での生活の様子	高齢者の入院・入所生活を把握する	2	基礎①	
143	高齢者の入院生活				
144	理解力に合わせた指導を	理解力に合わせた指導の大切さ	2	なし	
145	指導 相手の理解度に合わせる				
146	観察	表情や様子を観察することの大切さ	1	基礎②	
147	報告	報告時の留意点	1	基礎②	
148	レクリエーションの与える影響	レクリエーションの与える影響	1	なし	
149	納得のいく説明をすることは難しい	納得のいく説明をすることは難しい	1	なし	
150	ターミナル期の看護	ターミナル期の看護の大切さ (苦痛の緩和、声かけ、タッチング)	1	成人①	
151	予後に対する孤独・不安	予後に対する孤独・不安	1	成人①	
152	回想療法の重要性	回想療法の重要性	1	なし	
153	感染防止	感染防止の大切さ	1	基礎①	
154	健康教育	患者教育の大切さ	1	なし	
155	利用者のニード	利用者ニードの理解	1	基礎①	

り、最も少なかった。カテゴリは、「情報を共有し、いろいろな職種の人が協力しチーム医療を行っている」「他職種との連携からみた病棟の特徴」「社会資源の活用の必要性」「施設における看護師の役割」等の5項目であった。そのうち情報の共有化については、「作業療法士・理学療法士・介護士などと情報を共有し、患者のADL（日常生活動作）や疾病による影響を考え看護が行われている」という記載がみられた。施設における看護師の役割では、「毎日医師の診察が行われていないため入所者の日々の観察を行い、状態を把握することが必要である」という記載がみられた。

実習目標6に関するラベルは35枚で全体の22.7%であり、最も多かった。カテゴリは、「高齢者の余暇の過ごし方を知り、その意識と大切さの学び」「患者のペースに合わせる事が大切」「一緒に楽しみながら、患者にも楽しんでもらう」「意欲向上のための援助」「高齢者になっても男性は男性、女性は女性でる」「看護の楽しさの実感」「QOLへの援助の必要性」「患者とともに行う援助の重要性」等17項目であった。特徴的なものとして、「患者とのコミュニケーションや援助を通して、高齢になっても男性は男性、女性は女性だと学んだ」などの記載がみられた。

実習目標に該当しないラベルは32枚では全体の20.8%であった。カテゴリは、「コミュニケーション技術について」「総合的理解と援助の重要性」「高齢者の入院・入所生活を把握する」「報告時の留意点」「レクリエーションの与える影響」「ターミナル期看護の大切さ（苦痛の緩和、声かけ、タッチング）」「予後に対する孤独・不安」「感染防止の大切さ」「患者教育の大切さ」「利用者ニーズの理解」等14項目であった。そのうちカテゴリ「コミュニケーション技術について」「利用者ニーズの理解」「高齢者の入院・入所生活を把握する」「感染防止の大切さ」は、基礎看護学実習Ⅰの実習目標である入院患者の生活の場を理解する、患者とコミュニケーションができる、患者の日常生活を理解できる、患者の基本的ニーズを満たすために必要な日常生活の援助の実施に該当した記載であった。カテゴリ「表情や様子を観察することの大切さ」「報告時の留意点」「総合的理解と援助の重要性」は基礎看護学実習Ⅱの実習目標である患者の全体像を把握し、日常生活援助を計画・実施・評価できるに該当した記載であった。またカテゴリ「ターミナル期看護の大切さ（苦痛の緩和、声かけ、タッチング）」「予後に対する孤独・不安」は成人看護学実習Ⅰの実習目標である「終末期にある対象を理解し、看護の役割を認識

できる」に該当した記載であった。

考 察

<実習目標1について>

学生は、老年看護学実習を通し、高齢者の持てる力や高齢者に対するイメージを、古城ら²⁾の研究と同様に否定的イメージから、明るく活力ある豊かな経験を供えた尊敬されるべき存在としての肯定的イメージと変化し、目標はほぼ達成されている。

しかし、高齢者の身体的・精神的特徴については学びが得られやすい反面、社会的側面については学生自身でとらえることは困難であったと考えられる。これは、老人福祉センター・デイサービスセンター実習において高齢者の特徴について討議されることが多い。この討議の中で社会的特徴についても話し合われるが、学生の1週間の学びの中での印象としては弱いことが示唆された。

特にカテゴリ「加齢に伴う変化・症状は変化しやすい」等に見られるように視覚情報としてとらえやすい身体的特徴は学生にとって、理解しやすいが、社会的側面については、高齢者とのコミュニケーションから意図的に情報収集しその意味をアセスメントしなくてはならない。基礎データとして情報収集できていても、社会的特徴について考察し思考を深めることが困難であったことが考えられる。

生活習慣や発達課題については視点が向けられているが、未来志向での高齢者に向ける視点は、現在の状況を捉えることに精一杯な学生にとっては容易ではないことが推測される。この点においては、3週間の受け持ち期間を通し、グループ内での討議を重ねることにより学習することは可能であり、受け持ち3週目以降は、特に高齢者とのコミュニケーションや関係性が改善され、把握しやすい状況にあると考えられる。

今後は、ケースカンファレンスやテーマカンファレンスを活用し、社会的特徴やその意味付けを教員が指導し、理解を深める必要があることが示唆された。

<実習目標2について>

成人看護学実習においては、成人期にある対象の健康の維持、増進、疾病予防や、健康レベルに応じた看護を展開する能力を養うことが目標となっている。それに対し老年看護学実習においては、在宅復帰をめざし、生活障害に視点をおくことが重要となる。

特に、指定介護療養型医療施設や介護老人保健施設を実習施設とし、健康障害よりも生活障害を看護展開する必要がある対象を受け持つことから、カテゴリ

「残存機能活用によるセルフケア能力の向上」「障害とうまくつき合っているような援助」等生活障害に視点を置いた看護が学習され、実習目標2は達成されたと考える。また、老年看護学において、生命回復遅延・悪化に大きく影響する事故防止の観点は大変重要であるが、安全を考慮したカテゴリ「観察・見守ることで転倒・転落を予防する」の看護についても生活障害に関わる援助を通し学習されたものとする。

しかし、社会的要因が生活に及ぼす影響については、目標1と同様にラベル記述は非常に少なく、学生の認識は低いことが示唆された。現代の学生は、初めて出会う家族へどのように働きかけて良いのかイメージすることも実施することも困難であるとする。指導する側が、意図的に面会場面に誘導することや、カンファレンスなどで社会的要因について情報提供を行う等の関わりが必要である。

<実習目標3について>

老年看護学実習Ⅰは、老人福祉センターやデイサービスセンター実習を1週間行い、入院・入所している高齢者とのイメージの違いを認識し、高齢者の多様性や個別性を学ぶ機会である。学生は、カテゴリ「長寿センターの役割」「地域全体での支えあい」等から高齢者にとっての地域や福祉の役割が理解されている。しかし、デイサービスセンターの送迎を通し家族と接する機会が少なく、またその機会から家族の果たす役割まで想起することは、学生には難しい。その場面をとらえて指導することや、経験した場面を活用し、家族や地域社会が高齢者にとって持つ意味を問うことや討議することが必要である。

カテゴリ「自尊心の尊重の重要性」については、目標は達成されている。これは老人福祉センター・デイサービスの実習に限定されたことではなく、実習全般を通して高齢者観や看護観を深め養われることであり、目標6の内容として位置づけることが効果的と考える。

<実習目標4について>

老年看護学実習Ⅱでは、1名以上の患者または入所者を受け持ち看護過程を展開する。学生は看護過程に対する認識は高く、カテゴリ「情報収集・アセスメントをとおしてその人にあった個別性を考慮した看護」が学習され、老年期の個別性についても同様に学習されているものとする。

下村ら³⁾は、2週間の老年看護学実習の中で看護過程の展開を行うことは、かなりの努力を要すると報告している。K短期大学の看護過程展開では、3週間で

看護過程展開を行うため個別性を考慮した看護が学習されたものと思われる。

老年看護学における個別性とは、人生史や人生観を含めて対象を理解した上での看護と考える。しかし、学生の学習は抽象的であり、小皿の看板は、<個別性><個別性の重視>等具体的な表現ではない。看護における個別性とはどのようなことを意味するのか高齢者観と統合し、明確にできるようなかわりが重要となる。

高齢者は精神的・社会的機能の変化から、回復への意欲や生きる意欲の低下につながりやすいため、リハビリテーションの意義は大きい。カテゴリ「リハビリテーションを継続することで、入所者の自信につながる」「患者様にあったケアの工夫」等、学生は指定介護療養型医療施設や介護老人保健施設のケアよりもケアに関わる実習を経験することにより、高齢者にとってのリハビリテーションの意義を確認できたものとする。

<実習目標5について>

指定介護療養型医療施設や介護老人保健施設他での実習は、病院実習とは明らかに異なる実習経験であり、環境や日常生活の違いは学生にとっては把握しやすい。この違いのもつ意味について考えを深めることが必要であるが、学生の学びは4.6%と最も少なかった。

老人福祉センター、デイサービスセンター、指定介護療養型医療施設や介護老人保健施設においては、医療・福祉に携わる様々な職種が高齢者に対応し、日常生活援助を行う。高齢者の在宅での生活をサポートする上では、これらの職種との連携は必要不可欠であり、今後ますますその重要性が求められる。カテゴリ「情報を共有し、いろいろな職種の人が協力しチーム医療を行っている」「他職種との連携からみた病棟の特徴」「施設における看護師の役割」等から、介護との違いは何か、看護師の役割とは何かについて自己の考えを深めていると考える。

しかし、ソーシャルサポートシステムの現状についての学びにおいては、カテゴリ「社会資源の活用必要性」のみであった。このことから、社会資源に関する学習が不足していることが示唆された。医療・保健・福祉政策は目まぐるしく変化している。ソーシャルサポートシステムの知識と活用方法について学習がすすめられるような関わりを強化することが必要であるとする。

<実習目標6について>

ラベルは最も多く、22.7%に達した。学生は、高齢

者の特徴を理解し、自己の高齢者観や看護観を構築しているものと考えられる。カテゴリ「高齢者の余暇の過ごし方を知り、その意義と大切さの学び」「患者のペースに合わせる事が大切」「意欲向上のための援助」等から、機能の維持・向上のために、余暇時間を活用し、日々の看護や継続看護を展開する中で高齢者のペースに合わせ、意欲や生きがいに結びつくことの重要性を学習できたと考えられる。また、カテゴリ「一緒に楽しみながら、患者にも楽しんでもらう」「高齢者になっても男性は男性、女性は女性」等意欲や楽しみ、ジェンダーについての意識が少なからず見られた。しかし、そのことが高齢者の生命の質（QOL）と関連することには結び付けられていない。意欲や生きがいと、生命の質（QOL）との関連について考えを深められるように関わる必要がある。

<実習目標に該当しない学びについて>

該当しない学びは20.8%と多く見られ、そのカテゴリは基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ、成人看護学実習Ⅰに該当する内容であった。

特に最も多いカテゴリは「コミュニケーション技術について」であり、基礎看護学実習Ⅰの目標に該当する学びであった。学生は、家族形態や社会の変化から高齢者や他者との直接的コミュニケーションの場が減少していると考えられる。基礎看護学実習においてもコミュニケーションを難しいと感じる学生が多い中、知覚機能が低下した高齢者やジェネレーションギャップが大きい高齢者に対応することは、より高度なコミュニケーション技術や話題の提供が求められる。3年次の学生であっても難しい技術であることが示された。したがって、コミュニケーション技術については、実習目標4の看護活動の実践として組み入れる必要がある。

また、成人看護学実習Ⅰの目標に該当したカテゴリ「ターミナル期の看護の大切さ」「予後に対する孤独・不安」については、成人看護学実習を経験する前で終末期看護の経験が初めてであったことや、成人看護学実習を終了していても終末期の看護については経験されなかったためと考える。近親者の死でさえも経験されることが少ない学生にとっては、ターミナル期の看護は意味深い学習であったと考えられる。

目標に該当しないカテゴリ「理解力に合わせた指導の大切さ」「レクリエーションの与える影響」等も抽出され、学生は実習を通し目標以外の学びを得ていることが示された。梶田は「人間が学んでいくということの中には、実は外側に現れない部分が大きく存在す

る」⁴⁾と述べているように、臨地実習を通して得る学びは多様な形であり、その意義は大きいと考える。

まとめ

ラベルワークを活用した老年看護学実習における学びを分析することにより、以下の結論が得られた。

1. 実習目標はほぼ達成され、特に目標4の看護過程の関する学習、目標6の看護観や高齢者観についての学習は深められている。
2. 学びが不足している目標は、目標1・2の社会的側面の理解や目標5のソーシャルサポートシステムについてであり、カンファレンスや実習の機会をとらえたタイムリーな学習強化が必要である。
3. 自尊心の尊重の重要性について学生の学びは大きく、これは老人福祉センター・デイサービスの実習に限定されたことではなく、実習全般を通して学習されることであり、目標6の内容として位置づけることが効果的である。
4. 高齢者とのコミュニケーション技術に関する学習を学生は、難しいと感じながらもその学びは大きい。老年看護学実習に目標4の看護活動の実践として目標設定する必要がある。
5. 老年看護学実習の目標に該当しない学びや、基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ、成人看護学実習Ⅰの目標に該当する学びも見られた。

おわりに

老年看護学実習においては、身体的・精神的側面だけでなく、広い視野で高齢者をとらえることがますます要求される。講義で得た知識を統合し、看護実践能力を習得するために臨地実習での学びの意義は大きい。今後も実習目標や指導のあり方を評価し、改善していきたい。

今回の研究の限界として、ラベルの分析が学生個々の1週間の学びの分析であり、1日1日のラベルの記述や、まとめレポートに記載された学びとの整合性について今後検討を加える必要がある。

引用文献

- 1) 林義樹：参画活動とその指導の理論。参画文化研究会，54-70，2001。
- 2) 古城幸子，木下香織ら：高齢者理解を深める臨地実習のねらい。新見公立短期大学紀要，20：1-8，1999。
- 3) 下村裕子，西川佳之ら：老年看護学実習の構成

- と展開－老年看護学実習。の目標達成状況を通して－。慶応義塾看護短期大学紀要，10：47-57，2000.
- 4) 梶田叡一：教育評価－学びと育ちの確かめ－。放送大学教育振興会，63，2000.
- 5) 沖中由美，中野静子：老年看護学実習における学びの分析。愛媛県立医療技術短期大学紀要，15：81-87，2002.

The Analysis of the Learning with the Use of Labeling Works in the Elderly Nursing Science

Miwako Nagata, Keiko Morita, Mituko Watanabe

Abstract

We analyzed what students had acquired from the labeling works in the elderly nursing science training, assessed the students' achievements toward the objectives, and examined the effectiveness of training instructions. The results showed that the training objectives have been nearly attained, especially, the learning related to the nursing process, the view of the elderly and nursing science have been deepened. On the contrary, the understanding of social aspects and social support systems are not fulfilled, which indicates the necessity of timely improvement of the learning through conferences and learning opportunities relevant to social aspects and social support systems. We also observed the learning that was not listed on the objectives of elderly nursing science training or those were listed on the objectives of fundamental nursing science I/II and adult nursing science I.

Keywords: Label work, Old age nursing study practice, Practice target, Practice evaluation